様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　6　月　1　日現在

機関番号：２３４０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：　2009　～　2011
課題番号：２１５２００７４
研究課題名（和文）岩下壮一と綱脇龍妙にみる救癩思想の比較宗教学的研究

研究課題名（英文）Study of comparative religion about thoughts of leprosy relief for Iwashita Soichi and Tsunawaki Ryumyo

研究代表者　輪倉　一広（WAKURA KAZUHIRO）
福井県立大学・看護福祉学部・社会福祉学科・准教授
研究者番号：10342122

研究成果の概要（和文）：岩下壮一（カトリック司祭）と綱脇龍妙（日蓮宗僧侶）の救癩実践の思想を比較宗教学的に検討した。ふたりの事業への契機とその後の救癩を主題化する過程において両者の思想的相違を比べてみると、前者については、救癩の功徳を岩下は父親の社会的罪の償いに、また綱脇は社会の教化に充てようとしたことがわかった。また、後者については、岩下が患者と教会との倫理的な信頼関係構築により患者の主体形成を図ったのに対して、綱脇は救癩の倫理的諸問題に患者を据えず、「深敬礼拝」の関係論へと短絡的につなげたことがわかった。

研究成果の概要（英文）：I studied the thoughts of leprosy relief of Iwashita Soichi and Tsunawaki Ryumyo as a comparative religion. Comparing the two ideological differences between Iwashita and Tsunawaki in the business opportunities and the process of the topicalization of leprosy relief. For the former, Iwashita converted the merit of his activities of leprosy relief to the atonement of social sin of his father. By the other hand, Tsunawaki converted it to the edification of society. For the later, Iwashita aimed at the formation of patients by building a ethical relationship of trust between patients and the church. By the other hand, Tsunawaki did not laid patients to the ethical issues of his activities of leprosy relief, and he connected it short-circuit to the theory of the relationship of “Jinkyo Raihai”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・宗教学
キーワード：岩下壮一、綱脇龍妙、救癩、ハンセン病、カトリック、日蓮仏教

１．研究開始当初の背景

これまで、私はおもに近代日本における福祉思想史の視座から、人々の社会化意識の形成・発展を見据えつつ、とりわけ現実としての人間行為（福祉実践）と社会変化との共時性に注目して研究を展開してきた。とくに、昭和戦前期に私立ハンセン病療養所「神山（こうやま）復生（ふくせい）病院」の院長（カトリック系施設）として救癩（らい）活動に従事した岩下壮一の福祉実践

の思想について、史料調査や聞き取り調査などのフィールドワークをもとに可能な限り実証的に研究してきた。

ともすると、近代日本のハンセン病問題は、戦後の人権思想や市民社会思想と患者運動、さらにはそれらがとりわけ政治的な研究運動と同期することで、固定的なバイアスをかけられて表層的あるいは平板的に評価されてきたきらいがあった。しかし、とりわけ社会的排除や抑圧あるいはその反対方向のベクトルをもつ福祉というような人間の意識・文化やそれに基づく行為を社会的・歴史的文脈の中でその所産としてとらえなければならない研究領域においては、研究対象を単に表層の関係だけでなく深層の関係からもとらえて検討することが重要である。

したがってこれまで取り組んできた研究は、岩下壮一という近代日本に生きたひとりの思想家・社会事業家を通して、単に岩下の救癩思想がどのようなものであったかだけでなく、岩下にそれぞれ照射された癩患者と国民国家との関係（これは近代日本救癩史の本質的なテーマでもある）についても検討してきた。その方法としては、岩下の救癩実践・思想を相互主観的な視座――すなわち、患者と国民国家とを媒介する位置にあった岩下に向かって照射された患者たちの国民国家観と、国民国家（民衆を含む）が理解し、また期待した患者観の両方から析出しようとする視点――から検討しようとしたものである。

ともあれ、私が取り組んできた研究は絶対隔離推進期と呼ばれる 1930 年代の近代日本救癩史の深層構造を明らかにすることに射程を据えている。これまでの研究から明らかになったひとつの点は、1930 年代の天皇制国民国家における癩患者のアイデンティティ志向が、あくまでも自然な意識的通路を介して、結果的に天皇制国民国家と密接につながっていたということである。つまり、患者は天皇制国民国家の救癩政策によって強制的に国民国家の周縁へと駆逐させられたにもかかわらず、なおも引き続き自然な欲求感情の発露として、彼らが許された小社会（救癩施設）の域を超えて天皇制国民国家へと民衆性意識を親和的に志向させていたのである。それは、従来言われているような患者のもつルサンティマンというような解釈では不十分なものであった。

また、岩下の主観的な救癩思想の側面についてみれば、皮相的には他の救癩事業家の場合と違わず倫理的な人間 - 社会の関係理解の上に立っていたかに見えるが、その思惟構造においてはカトリック思想に固有の特性を有していたとみることができる。その固有性とは、すなわち対極にある二つの事象を対立的あるいは二元的にとらえることなく、相関的・一元的に理解しようとするカトリシズム的な思惟態度であった。より具体的には①患者個人と国家との関係を連続的にとらえようとして個人の主体形成に力点を置く態度であり、また②真理探究における信仰と理性それぞれからのアプローチを最終的には総合してとらえようとする態度であった。こうした視点は、まさに「人間観」と「社会観」の探求であるといえる。

包括的な意味での近代日本救癩史を再検討するにあたっては、とりわけ患者と国民国家との内在的な関係の問題については、個別事例的な岩下研究からどこまで一般化して理解できるかが課題となる。これについては、研究の方法が相互主観的な視座からの検討ということである程度の一般性をもって理解できると思われるが、それをより確かなものとするためには、国公立・私立を問わず他の救癩施設の管理者や社会事業家の場合にも拡大し、いずれも可能な限り実証的に検証してみる必要があろう。

とくに、19 年度からは科学研究費補助金を受けて今年度までの３年間で取り組んだ課題は、仏教系（日蓮宗）の私立救癩施設であった「身延深敬（じんきょう）病院」で福祉実践にあたった綱脇龍妙の救癩思想と岩下のそれとを比較してみることである。それにより、とりわけ綱脇の救癩実践を生み出したそれぞれの思想基盤と実践の原理を、また患者と国民国家との内在的な関係を、社会・文化とのかかわりの中から実証的に引き出すことができる。

２．研究の目的

近代日本救癩史において、宗教救癩事業の果たした役割は小さくない。しかし、従来の近代日本救癩史研究では、一般に患者と国民国家との関係が国家権力に基く支配−被支配の構図で短絡的かつ平板的に捉えられてきた。そこで、本研究では救癩国策の影響下にありながらも患者と国民国家との間で、葛藤しつつ活動した宗教家が両者の関係をどのように捉え、どのように救癩実践へと関係づけようとしたのかについて、カトリック社会事業家であった岩下壮一と仏教社会事業家であった綱脇龍妙との救癩思想の違いから比較宗教学的に明らかにしようとしたものである。

３．研究の方法

文献研究に関係者からの聞き取りを加え、教理的な検討を行うことにより、ふたりの宗教者の間の実践思想の比較を行った。

その際に注意した点は、とくにカトリックにおいては第２バチカン公会議（1962-1965）以前と以後では社会や他の教会に対する態度等が大きく変わったことにより、現代のカトリック及びカトリシズムの解釈で検討することは適当ではない。よって、本研究で取り扱う 1930 年代のカトリック教会の立場やカトリシズムの解釈をもって検討した。なお、綱脇の救癩実践の期間は岩下のそれよりもはるかに長いが、本研究における同時代比較のために両者の共通の時期である 1930 年代を扱っている。それは、ちょうど絶対隔離推進期と呼ばれた隔離収容主義が絶頂期を迎える時期でもあった。

また、本研究はあくまでも実践思想の研究を目指すことから、可能な限り両者それぞれの直接に福祉実践を惹起させる人間観・社会観を通してふたりの救癩観を解釈・記述することに注意した。したがって、とりわけ従来の綱脇研究にみられたような、業績等の歴史現象に関する記述は必要最小限にとどめた。

さらに、関係者からの聞き取りを宗教者本人の言説を補足、補強するものと位置づけ、積極的に利用することにした。

４．研究成果

本研究のおもな成果は、論文「ふたりの宗教家にみる功徳の転換性の様相―救癩事業をめぐる比較思想史的考察」（既刊）と論文「ふたりの宗教家にみる〈救癩〉の主題化と倫理」（学術雑誌投稿中）にまとめた。

まず前者の内容を述べる。宗教家が救済事業に携わろうとする際の直接的な契機を内的に承認し、支持する思想は、教義・教理に裏付けられて当該宗教家の信条の中に対他的な奉仕行為が是認されあるいは義務化されて内包されている場合がほとんどであろう。一般的に、キリスト教で「慈愛」と呼び、また仏教で「慈悲」と呼ばれる思想は、いずれも実践に近づけてとらえれば対他的な奉仕の内的契機を表している。また、両者の福祉実践としては「慈善 caritas/charity）」、「布施」という対称的な概念設定が成り立つ。しかし、両者はともにその実践によって、結果的に「功徳」と呼ばれる果実を生むものである。

この「功徳」は元来は仏教の用語であるが、訳語としてはキリスト教においても用いられ、ともに教義上の重要な概念の一つである。しかし、その意味するところは異なっている。とくにカトリックにおける功徳とは神から報賞を得ることができる道徳的善業を言い、トリエント公会議（1547 年）で明らかにされたように、神の聖寵により義と認められた人々は善業の報いである功徳によって永遠の命が期待できる、と解釈されている。他方、仏教とりわけ大乗仏教では善業が〈業〉の因（直接）や縁（間接）となって未来に「可愛（好ましい）」の果である功徳を得、その積み重ねにより涅槃へと進むと解釈されている。ただ、仏教において究極目標としての涅槃に至るには、善悪因果を超え煩悩を滅する実践が求められている。つまり、善業と功徳との関係は、カトリックにおいては善業が救いの必要条件としての役割をもち、一方、大乗仏教においてはそれが必要十分条件としての役割をもっているところに両者の重要な違いを認めることができる。

宗教家にとって救済事業は、困窮する者や病める者をあるいは霊的に迷える者を救済するという直接的で利他的な意義をもつことはいうまでもないが、それとは別に宗教家自身が社会活動によって得た功徳を間接的に社会や信徒たちに移し替え（＝転換）ることができるという側面を併せもっている。この原理は、カトリックでは「功徳の転換性」と呼ばれ、また仏教では「廻向（＝回向）」と呼ばれている。

岩下は晩年の 10 年間（1930-1940）、仏人カトリック神父によって設立・継承されてきた神山復生病院の第６代院長（邦人初）として昭和戦前期の不自由な社会情勢の中で救癩事業に携わった。一方、綱脇は 1906（明治 39）年から最晩年の 1970（昭和 45）年まで自ら設立した身延深敬病院（1943 年に身延深敬園と改称）の理事長・園長として戦前・戦後を通して救癩事業に携わった。

したがって、本稿は宗教的な立場を異にしたふたりの事業家の救癩事業への契機に着目して、その思想的相違を「功徳の転換性」の視点から内的（＝因）および外的（＝縁）に比較検討することを目的とした。

検討の結果、岩下の救癩事業の対象は院内外の癩患者のみならず、消極的ながら患者を包摂する国民国家にも向いており、〈功徳の転換性〉の教理に照らして考えれば、そうして取り組まれた救癩事業を通して得た功徳を、長子として父の犯した社会的罪の償いに資するために（国民国家ではない）社会―すなわち、個々人が私的な関係を切り結ぶ場―へ転換しようとしたことがわかる。

また、綱脇においては法華経の弘通による

社会教化こそが彼の大願であった―それは、救癩事業とは比べ物にならないほど主体的な動機に支えられていた―がゆえに慈悲利他行である大乗仏教を強く意識し、その結果、廻向の解釈を付加したものと思われる。そもそも、常不軽菩薩品は直接に法華経の教えを人々に説き、それが受け入れられた正法の時代から、やがて正しい教えが消えて、高慢になった僧たちによって教え自体が攻撃されるような像法の時代へと移った頃の時代背景をもっていた。だから綱脇は、自身が生きる末法の時代ではなおさらに法華経の弘通に常不軽の行ったような間接的な折伏法による2段構えの方法―すなわち、まず仏の大慈悲心から来る衆生の仏性を説き、それにより自覚させ、しかるのちに正法の教説を雄々しく説く方法―が最善策であると確信し、その積極的な意志が廻向の思想を引き寄せたものといえよう。

次に、後者について述べる。宗教家であり救癩事業家であった岩下壮一と綱脇龍妙が、それぞれの〈救癩〉を思想的にどのように主題化していったのかという課題については、前者はこれまで筆者が関係者からの聞き取り等も加えて検討してきたわけであるが、（前述の論文にもいえる点ではあるが）後者はまったくといえるほど検討されることはなく、まして両者の比較視点からの検討は皆無に等しかった。1930年代は、救癩史にとっては「絶対隔離推進期」と呼ばれ、負の遺制である癩政策の絶頂期にあたっていた。また同時に、その時期は準戦時期であることから、全体主義のイデオロギーや両者の時局観についても否応なく言及せざるを得ない。

この論文では、ふたりの依って立つ教理理解にもとづいて、「国家」か「個人」か、「服従」か「抵抗」か、さらには「不易」か「流行」か、といったような人間‐社会を架橋する倫理問題との関係で検討した。つまり、岩下と綱脇のそれぞれの〈救癩〉に関する倫理観を比較宗教学的に検討することで、ふたりの人間観・患者観およびそれと併せて社会観の違いを明らかにしようとしたものである。それはまた、前述の論文でとり上げた、ふたりの〈救癩〉への思想的契機の分析をさらに進めて、実際にどのように〈救癩〉を主題化していったのかを検討しようとしたものでもある

検討の結果、岩下は、患者たちが普遍的な哲学を内包するカトリシズムを介して「意識的」に教会とそのような倫理関係を築こうとすることで積極的・主体的な「生」を獲得する―すなわち、主体形成を図る―ことができると理解したのである。したがって、岩下にとっての〈救癩〉は、最終的には〈患者〉個人が〈権威主体〉である教会・聖職といかに一致できるかという倫理の問題として再認識されることで主題化されていったのである。

また、綱脇にとつての〈救癩〉の主題化は、『法華経』常不軽菩薩品の精神である「深敬主義」に一貫して取り組み、対患者を超えた〈大乗仏教〉の普遍的な救済観のもとで慈悲行を展開していこうとしたことで押さえられる。しかしその一方で、患者一般に対する〈同苦〉の感情は綱脇の救癩実践を支えてはいたが、岩下が問題にした患者の主体形成という、人間観に社会観を架橋させるような積極的で二者相関的な視点は希薄であったといえる。それは、綱脇にあっては〈救癩〉の倫理的諸問題が〈患者〉を起点とされることなしに徹頭徹尾「深敬礼拝」という絶対的な人間‐社会の関係論へと無条件に回収されていったからであると考えられる。

本研究の成果である上記 2 論文は、従来、救癩事業家の実践思想についての比較宗教学的研究がほとんどみられなかった点からすれば、宗教家の福祉実践の思想を具体的に解明した数少ない研究成果であるといえよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）
① 輪倉一広、ふたりの宗教家にみる功徳の転換性の様相、福井県立大学論集、査読有、36 号、2011、19-32

６．研究組織
(1)研究代表者
輪倉一広（WAKURA KAZUHIRO）
福井県立大学・看護福祉学部・社会福祉学科・准教授
研究者番号：10342122

(2)研究分担者
なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　（　　）

研究者番号：